

## 田中源太郎 一数奇な運命一



現在、JR 嵯峨野線（旧山陰線）は2車線高架になっています。この写真のお墓群が創られた当時は、すぐ近くに単線の山陰線が走っていました。そしてこのお墓群は、この山陰線の工事中に亡くなられた方々を供養するために、奉られたということです。特に保津川あたりの工事は難渋を極め、犠牲者が多数出たそうです。



“田中源太郎翁” この山陰線の生みの親、その人であります。

国鉄山陰線は旧京都鉄道。明治三〇年に二条嵯峨間が開通し、さらに2年後には、嵯峨園部間が開通し京都園部間に誕生した鉄道です。京都市と北部を結ぶ交通機関は明治の京都にとって、それは府市産業の拡大を図る大目標でありました。口丹波に生まれ、すでに府会議員として、また京都株式取引所、亀岡銀行（京都銀行）京都織物会社、京都電燈会社などを創設して京都の近代化を進める田中源太郎翁にとって、鉄道の実現はかねがね天命のようにも感じていました。

明治22年、京都商工会議所の濱岡光哲、高木文平らと京都舞鶴間の鉄道京舞線の敷設をはじめ政府に出願。結果は却下。翁はくじけず帝国議会で鉄道問題が論議されるたびに、府民の賛同を集めて実現運動を展開しました。やがて官設が困難と判断するや、「いつまでも国が腰を上げるのを待っているわけにはいかない。いまは我々の手で・・・」と決意。明治26年、翁は濱岡、中村栄助らとともに、「京都鉄道会社」を設立して敷設を訴えました。2年後には工事の許可を取り付けました。着工は明治29年4月、4年間で二城嵯峨間を手始めに大宮二条間、京都大宮間、嵯峨園部間が完成しました。だが工事は順調では無かったです。京都亀岡間はちょうどノド首をしめる格好で山が迫り、その山に切れ込んで流れる保津川。工事は難渋を極めました。費用は予算を大幅に上回り。おかげで園部以北、舞鶴までの線路は断念せざるを得なかったのです。京都舞鶴間が線路で結ばれたのは、翁の京都鉄道が国に買収されてから。京都園部間、およそ35キロ。翁の夢からすれば短い鉄路ではあったけれど、京都を縦断刷る大動脈の“さきがけ”となり、発展の端緒をつくったのでした。そして、それは運命的としかいいようのない符号であったのです。大正14年4月3日午後5時35分、国鉄嵯峨線保津川鉄橋で亀岡発上り列車が突然脱線転覆、車掌1人死亡、乗客1人行方不明、20人が重軽傷を負いました。そしてその行方不明の乗客は、この鉄道の生みの親であった田中源太郎翁その人であったのです。翁はこの日、郷里亀岡を訪ね、久しぶりに旧友たちに会って京都に帰宅途中でした。事故2日後、午前11時34分、行方不明の翁が遺体として発見されたのは保津川の千鳥ヶ淵の水中であったのです。脱線した機関車に連結された列車があとから突っ込み、翁の乗っていた2等車の底が裂け転落という事態になったようです。京都鉄道会社社長として、京都市と丹波を結ぶ山陰線の先駆けを完成させた翁にとって、その事故は偶然とはいえ、あまりにも悲しい奇禍であったのです。田中源太郎翁の孫で、当時中学生だった田中秀雄さんの追想があります。一祖父（翁）の行方不明を知ったのは、東京の岡本旅館という場所でした。丁度、電鉄博が開かれていて、父（一馬）に連れられて見物に出かけていたんです。旅館ではたまたま商工会議所会頭の濱岡光哲さんもご一緒でした。夜、突然、電話があつて、あと父の様子が尋常ではない。無言。目には涙がいっぱいでした。祖父のことを聞いたのは暫くしてから。わすれませんか。今でも一



当時の「日出新聞」によれば、「私が抱いて上がる」こう予言した潜水夫の1人は果たして翁の死体に横着、「頭部に創傷あり、あまり水は呑んで居らず、極めて美しき身体にて・・・」株式取引所を創立し京都電燈の社長として電灯を市内につけて、そして自らの敷設した鉄道に散った翁の数々の事業は常に周知に練られた京都近代化の先駆けにほかならない。と。奇禍に遭う一年前、翁は「京都の過去と将来」と題した論文をまとめ、こう結んでいる。「・・・帝都たる此地に住し、その偉観を永久に支持し、時潮に順応、これが発展の策を講ずるその方途もとより多端なり。・・・敢て望む、市民諸氏が宇内の大勢に鑑み、研磨努力をもって百年の大計を誤るなからんことを・・・」



翁が住んで居られた亀岡の邸宅は歴史的建造物に指定され、現、お持ちの方が100年くらい前に譲り受け“楽々荘”として経営されていたそうです。この庭は庭師小川治兵衛作で夏はビアガーデンとなっていたようでもあります。現在は別の方が借りられ運用されています。

(京都新聞：抜粋参考)

記：阿部会員

{あとがき}

別の方というのは、たまたま寄せてもらったレストランの総括支配人の話によると、「我が社がレストランチェーン展開で現在、元田中邸を借用している」とのことでした。

—こんなときに使う言葉「世間は広いようで狭いですね」—